

<b>Title</b>	巻頭言 大震災を問う
<b>Author(s)</b>	阿久戸, 光晴
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.50, 2011.3 : 3-6
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3122">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3122</a>
<b>Rights</b>	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 巻頭言 大震災を問う

聖学院大学総合研究所副所長  
聖学院大学学長  
阿久戸 光晴

それは突然襲ってきた。三月一日（金）午後二時四六分、震源は三陸沖、牡鹿半島の東南東一三〇キロメートル付近、深さ二四キロメートル、マグニチュード九・〇という途方もない観測史上最大級の地震が東日本を中心に日本全国を震わせた。南北約四〇〇キロメートル、東西約二〇〇キロメートルもの断層が破壊された。直ちに津波警報が出されたが、その三〜四分後、潮位三〜九・三メートルの巨大津波（未確認目撃証言によれば最高約一五メートル）が東北地方の太平洋側沿岸部を中心に襲ってきた。津波は時速約三〇キロメートルという自動車並みの速度で遠浅の沿岸部の広い範囲を覆い尽くして行った（最大遡上高は四〇・五メートル）。そしてとどめの来襲は、翌日の三月一二日（土）午後三時三六分、福島第一原子力発電所第一号機が津波の被害を受けた後、水素爆発を起こした。三月一四日（月）には第三号機の爆発が続く。この大震災により、下から地震が、横から津波が、上から放射能禍が、襲ってくるという人間存在の基が震わされているのである。死者はすでに数千人に達し、行方不明者を含めると約二十万人にのぼる。電気等エネルギー資源、衣食住等に関わる生

活必需物資、これらが被災地において絶対的に不足している。

いったいこの大震災の正体は何であろうか。私たちはこの大震災を問わざるをえない。この大震災につながる過去とのつながり、この大震災が現在私たちに与える意味、そしてこの大震災に私たちが将来に向けてどのように関わればよいかの課題、これらを問わざるをえない。本紀要巻頭言では、しばらくこの問いを連続して追究してみたい。

まず、今回の大震災直後、某自治体の首長が「この大震災は、我欲を追求してきた現代日本人への天罰である」と言われた（後日一部修正された模様だが）。私たちはこのような深刻な災いと出会う度に、「因果関係」を考える傾向がある。新約聖書・ヨハネ福音書九章一〜三節によれば、弟子たちがある人を見て、その人が生まれつき目の不自由なのは本人が罪を犯したからか、その両親が罪を犯したからかをイエス・キリストに問う。イエスは「本人が罪を犯したからでも両親が罪を犯したからでもない」と答え、「ただ神のみわざが、その人の上に現れるためである」と言った。

そもそも人間がゆえなく苦難や災難を受ける理由や意味に、古来の哲学・宗教は取り組んできた。J・ボウカーによれば、その意味づけはおよそ四つの類型に分類されるという（『苦難の意味』、脇本平也監訳、教文館、一九八二年）。第一の類型は、苦難に忍従しつつ受容するものである。インド哲学を含む東洋的思索が代表的であるとされる。第二の類型は、苦難が生じる社会的構造原因に対して反抗することに意味を見出すものであるとされる。マルクス主義がその典型であるとともにイスラムの思潮の一部にもあり、この根源に苦難と構造悪との関係を認識するヘブライズムがあると考えられる。第三の類型は、苦難を因果応報でとらえ、そこには何らかの人間側の「罪責」が起因しているとする。因果応報説は一種の合理化説であり、新約聖書のエピソードにあるように「生まれつきの苦

難」のような合理化になじみにくい場合「前世」を仮説前提することがよく行われる。この因果応報説は、苦難に耐える納得となるとともに、「罪責」を防ごうとする人間の倫理を引き出すとする。この因果応報説は、イエスに問うた弟子たちの言動に見られるように、ヘレニズムを含め世界に普遍的に見出される考えである。旧約聖書でも箴言やヨブ記の「三人のヨブの友人たち」の言動を中心に見出される。第四の類型は、苦難とは人間にとって教育であるとする考え方である。苦難に耐えること自体に意味があることになる。仏典や旧約聖書やコーランに見出される。旧約聖書ではヨブ記の「エリフ」の言説や伝道の書、新約聖書ではヘブル書に見出される考え方である。思想上、苦難を考察する思索が深まる時、あるいは一段高く登る時に、しばしば見出される考え方である。この考え方は、苦難を受けている存在自体が自ら開眼した思索として妥当性があるが、安全な所にいる他者が説明しようとする場合、苦しむ者にさらに大変な苦しみを増し加えるものであることを忘れてはならないであろう。これらの苦難に関わる歴史的考察からすれば、「天罰」発言がいかに軽率なまでに通俗的発言であり不適切どころか、被災地の方々の苦しみを増すものであったか、明らかであろう。

ところで、イエス・キリストの苦難に対する姿勢は上記のどの類型にも当てはまらない。それは人間の罪責と苦難との因果応報の連鎖を断ち切り、自ら「ゆえなくして」十字架にかかることで、苦難にある人々と苦難を受けることを共有し、「新しい『わざ』を始めること」に身を捧げていく生き方である。それは苦難を避けることのできないものとして受け止めつつ、むしろ苦難を積極的に受け止めることによつて、新しい地平を啓くことに身を捧げていくことなのである。罪責の存在を認めないのではない。人間の一般的罪責から生ずる人間存在への苦難の関係を否定するでもない。苦難を受ける人の固有の罪責との因果を否定し、むしろ苦難を受けることを共有することで、人間を罪責から

解放しようとするのである（この点は次号以降の巻頭言でさらに深めたい）。

現在、大震災を受けている人々と受けていないご本人との「隔たり」を強調されたうえで、なし得ることを探究し呼びかけられる良心的思索者がおられる。しかし私たちは、「隔たり」の自覚よりも、この未曾有の大震災とともに「ゆえなく」共有し、被災地と被災地以外の地の人々の間の共同性を見出し、苦難そのものを「分かち合う」協働性に献身していくことが、今まさに急務であり、問われているのではないか。苦難の分かち合いから、新しい社会形成という「みわざ」の地平の分かち合いの重要性が、大震災において私たちへ示唆されているのではないだろうか。

東日本大震災を問い、その背後にあるものを問おうとする私たちこそ、実は逆に問われている。